

医事・文談 九百五十二 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その240  
子規と漱石(四十九たび続)

大正3年(一九一四)

前年末から東京金沢病院に入院して手術を受けたが、1月下旬、父母の入院のため退院、帰郷した。

帰郷するとなると、父母に代って家業に奔走せねばならず、自然無理を重ねることとなり、発熱が続く。日記によると、朝から7度以上の体温の上昇で、午後には8度を越すこともあるのである。

幸い母が軽快したので3月14日上京して、橋田内科病院に、5月29日まで入院するのである。入院中は解熱剤を投与され、安静にすることもでき、熱型も落ちつき「病勢大いによろしい」と日記に書かれる。

この入院中の4月5日、学会で上京中の久保教授を、その旅宿の上野精養軒に訪い、診察を受けている。前々から打合せがしてあったのであろう。

そして患部を焼くがよろしからうといわれたというから、前年の痕跡もないから、神尾医師の手術を経て、尚何かがあったのであろう。再発か新たな発病なのかは分らない。

久保教授の診察によって、治療を要すると告げられたので、内科の病状の落ち着きを待つて退院、6月10日四たび福岡に着した。早速久保教授の診を受けることができ、6月16日には内科の武谷教授の診察をも受けた。

この時は胸部にかなりの理学的所見もあり、喀痰も結核菌陽性であるから、肺結核もかなり進展していたことが分る。

6月10日午前、福岡に着してから、久保博士夫人より江を訪うたところ、時間外にも拘らず診察のことを博士に連絡して取計ってくれて、午後2時半病院で博士に会い診察を受けることができたのである。入院は空床がなく、すぐには無理だといわれた。

この時の内科の処方 次のようなもので、結核

の化学療法剤(ストマイ、パス、チピオン、ヒドラジットなど) 発見以前の典型的な結核剤で、筆者などには極めてなつかしいものである。

ピラミドン 〇・五  
ゾオタール 一・〇  
健末 〇・三  
麟コデ 〇・〇六

以上一日分、分三、食後分服

6月20日、漸く孤室を都合して貰い入院することができた。しかも官費にしてくれたと、節は教授の好意を感謝している。

痰に結核菌を認めると、遠い隔離病室に収容されるのが常だが、そこは遠くて毎日の治療もむずかしく、且つそこは穢くて雑居(という事は個室ではなく)だから、この処置は教授の特別のからいだと、教授夫人の談で分った。

唯、食餌の粗末なことは、驚くばかりであった。しかし教授夫人は無料で入院しているのだから、それくらいは我慢しなければと、私も毎日何か作って持ってきてあげますとおっしゃる。

昔は学問的に興味のある患者や、教授と特殊な関係にある患者は、官費患者として無料で入院させていたものだ。節も漱石の紹介もあり、久保教授の特別なからいを受け、内科でも同様官費の取り扱いであった。

久保教授は当時、耳鼻科では日本の第一人者と目されていた。節もその名声を慕ってはるばる九州まで来たのであった。そこで久保教授の行った治療法というのが、教授がドイツ留学中師事したキリヤン教授創始の方式というのであった。懸垂喉頭検査法といい、節もこの検査法下に手術を受けている。

この時の入院は6月20日から、8月14日のほぼ2ヶ月に及び、診断は喉頭結核及び肺結核で、治療としては喉頭の局所療法として乳酸塗布、電氣焼灼と穿刺であり、肺結核については対症的な薬物療法が行われた。

喉頭結核は左披裂部の潰瘍は治療により治り、あとは喉頭後壁深部の腫脹を残すだけで、そこは手術の及ぶにくい所だからしばらく放置して様子を見ることとし、肺結核は転地療法をすすめる、日向の青島に行くことにしていた。

表紙写真

チシマクモマグサ(ユキノシタ科ユキノシタ属)

札幌市医師会 鳴野 貞隆

大きな雪溪の下が好みようで、8月以降に融けだす雪溪跡が目にする事が多い。とはいっても何処にでも在るわけではなく結構わがままに住処を選んでいる。大雪山では北海岳の登

り口とか白雲岳下大雪溪が好みの場所のよう。白い花卉にかすかに赤い雄しべの先が映えて何ともかわいい花である。花は1cmくらい、花茎は3cmから最大で10cmくらい。